東大寺献物帳の書体選択とその時代背景
― 「国家珍宝帳」を中心として ―

川上貴子（筑紫女学園大学）

正倉院が所蔵する「国家珍宝帳」は、聖武太上天皇の七七忌（天平勝宝八歳（756））に、光明皇太后によって東大寺盧舎那佛に献納された太上天皇遺愛の品々の目録である。

「国家珍宝帳」は、全五巻の「東大寺献物帳」のうちの一巻であり、五巻のうち「国家珍宝帳」「種々薬帳」「大小王真跡帳」の三巻が天平勝宝八歳に、「大小王真跡帳」「藤原公真跡屏風帳」の二巻は二年後の天平宝字二年（758）に制作されている。本発表では、東大寺献物帳五巻を対象とし、書体の分析と制作背景の二側面からの検討を行い、国家的文書の書体選択の変化に国家権力の動向が影響を与えた可能性があることを指摘したい。

東大寺献物帳研究においてはじめて、史料的側面ではなく書としての側面に着目された杉本一樹氏は、奈良時代における国家最高の文書に相応しい「あるべき姿」が求められたとする見解を示された。発表者は、この杉本氏の指摘をふまえ、唐を中心とする作品と比較し「国家珍宝帳」の書体分析を行った。その結果、「国家珍宝帳」には、従来指摘されてきた伝統的な王羲之の書体に加え、同時期の玄宗周辺で流行していた革新的書体が併用されていることを新たに確認し、奈良朝においては、唐の最新の書体をいち早く受容した背景に、国家を表象する書体意識があることを明らかにした。

本発表では、「国家珍宝帳」に関して明らかになった書体選択と国家意識の関係を踏まえ、分析対象を東大寺献物帳五巻に拡大し、両者の関係の変化を考察したい。はじめに、東大寺献物帳五巻の書体分析を行う。その結果、制作年代にわずか二年の差しかないにもかかわらず、二つのグループに異なる書体が用いられていることが確かめられる。具体的には、「国家珍宝帳」を含む天平勝宝八歳献物帳には、書様式に写経的要素が共通して見え、その制作に紫微中台管下の写経所が関わった可能性が指摘できる。一方、天平宝字二年献物帳には写経的要素は見られない。天平宝字二年献物帳の二巻の書体はむしろ、それ以前に書かれた「平田寺勅書」（天平感宝元年（749））に共通する点が多く、両者は同一の書者による可能性が高いと判断できる。

つぎに、東大寺献物帳五巻の制作背景を考察する。「国家珍宝帳」における藤原仲麻呂の署名（位署書）は紫微令であるのに対し、天平宝字二年献物帳である「藤原公真跡屏風帳」では太保とされており、書体の変遷時期と当時の政権首座にあった仲麻呂が、皇后宮職系の紫微中台から太政官（乾政官）へと権力基盤を移していく過程は一致する。

以上のように、「国家珍宝帳」に代表される東大寺献物帳五巻の書体選択の変化に、国家権力の動向が影響を与えた可能性を指摘する。